**川村　欽吾 （かわむら・きんご）**

**１、プロフィール**

モダニズムの系譜に属する詩人。郷土研究家。早稲田大学在学の頃から詩作を始め、戦前は中央詩誌で戦後は青森県で発表した。県詩人協会会長となり、県詩壇の発展に貢献した。

＜生没＞

1908（明治41）年７月２日 ～　2001（平成13）年８月７日

＜代表作＞

『郷土の先人を語る（７）　兼松石居　平尾魯僊　秋田雨雀』（共著）

詩「空への献辞」（「詩法」創刊号）

＜青森との関わり＞

太平洋戦争下、仕事の関係で青森県に移る。昭和26年から弘前高等学校教諭。定年退職後、東奥義塾高校講師。

**２、作家解説**

本名、金吾。明治41（1908）年７月２日山形県東田川郡余目町大字余目字町20番地に生まれる。尋常小卒の後、鶴岡工業学校へ進み、２年次担任教師・春山駿助と出会い文学的影響を受ける。卒業後、高等小学校准訓導心得となるが、兵役のため退職する。除隊後、二松学舎専門学校入退学、昭和６年、早稲田大学高等師範部入学。在学中から詩作活動を開始し、大正14年７月から発行されていた「詩之家」同人となる。

時代は昭和３年９月創刊の「詩と詩論」に代表されるモダニズム詩隆盛であった。川村は昭和７年５月創刊「MADAME BLANCHE　マダム ブランシュ」同人、また昭和９年８月創刊された春山行夫編集の「詩法」の創設に参加、同人となって詩を発表した。

その後、「蒼氓」（昭10）の石川達三も同人だった「新早稲田文学」、「MADAME BLANCHE」の後身誌「二十世紀」、「詩と詩論」「詩法」の後継誌として昭和12年５月創刊された「新領土」などに属した。

昭和10年早稲田卒業。10月逓信省電務局企画課を皮切りに職場が転々と変わり、昭和19年５月青森航空機株式会社総務部庶務課長。昭和25年１月、青森県浪岡高等学校教諭となり、26年５月から弘前高等学校で44年３月定年退職まで勤続した。

青森県居住後は、特定の同人誌に所属することはなかったが、青森県詩人協会（現、詩人連盟へ改組）の中枢として、機関誌「年刊詩集」と同協会発行の季刊誌「らしん」に詩を発表した。昭和37年４月～41年３月、同協会会長、その後３年間顧問を務める。詩集は編まれていない。

また森鷗外研究のほか、陸羯南、兼松石居など、青森県の先人たちの足跡をたどる研究にも実績を残している。

**３、資料紹介**

〇「詩法」　創刊号

雑誌

1934（昭和９）年８月１日

250mm×190mm

「詩と詩論」の後継誌的詩誌。春山行夫編集。安西冬衛・村野四郎らの同人以外に伊藤整・西脇順三郎らが寄稿、昭和10年９月までに13号を発行。欽吾は「空への献辞」（６連構成）を２ページにわたって発表。以降、２・３号に１回ほどの割で詩を発表した。